

創造神教育係の日常

如月モヘンジョ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如26歳ニートの三鷹 小路（みたかこうじ）の前に現れたのは大天使と創造神候補の少女!? なんやかんやで彼女の兄兼教育係を任されて、すったもんだの日常劇が始まる!!

笑いあり涙あり、はたして少女は立派な創造神になれるのか!?

目次

第0話	前日譚	あるいは僕が選ばれた	
理由	——		1
第1話	日常的な非日常	1	8
第1話	日常的な非日常	2	11

第0話 前日譚 あるいは僕が選ばれた理由

神々の世界……

それは、天上でも地下でもない、この宇宙を超越したところからさらに遠く、というよりその周り……まあ、そういうところにしておこう。とにかく、人間とはほとんど縁のないようなものだ。

とにかく、そんな世界がある。

そして神は、霧から湧いたり、突然現れたり、消えたり、漠然としてるかと思いきや気分で世界をぶっ壊したり、喧嘩の最中に沢山子供を産んだり、そんな変なことをしている。

何をしているんだ……と思うかもしれないが、読者諸君がよく知っている日本神話のスサノオノミコトだって、姉（アマテラス）の神殿にウンコを撒き散らしている。つまり、神は何をしてもいいのである。

そんな世界にだって、当然リーダーみたいなのは存在する。ちようど、オリュンポスの頂点がゼウスであるように、その世界では神のリーダーが存在している。

だが、この世界はもうすでにその存在を忘れてしまっていた。

「だからさ、わかる？ 俺に酒をくれよ。酒をたーんまりと、わかるかい？」

「あんたは飲みすぎなんだよ。少しは自重しなさいよまったく」

火の神と嫉妬の女神。いいことがあったもんじゃない。火の神はいつも赤い顔をしているが酒を飲むとその顔をさらに業火のように赤く染める。そして禪をなくして裸になると、宮殿の女中を片っ端から追っかけ回すのである。

しかし神の世界ではそれは日常だ。

誰も咎めるものはない。

「おいおい、今度は何だ？ 6のゾロ目じゃないか？ てこたー、俺の勝ちだな」

「てめえ、またサイコロの数字をごまかしやがったな!!」

賭けの神と、商売の神。2人はいつもボードゲームで遊んでいる。嵐の神であるオーデインがそれを眺め、横からぶつくさど何やらつぶやいているのもわかる。

酒宴の席では、今日も神々が騒がしく浮かれ遊ぶ。一角獣はその様子を眺めながら大きなあくびを浮かべて、常に明るい部屋の隅でいびきをかいて眠る。

神のまにまに、憩いは久遠の果実なれ。

そんな言葉すらこの世界には存在する。

「え、皆さま、ちよつと時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

ひとりの天使が神々に呼びかけるがまったく反応がない。

「あの……その……どなたか、すみませーん、こちらを向いて……」

コツン……と頭にシャンパンのコルクが当たる。鈍いイライラが心の中に募るが、天使はその程度では動じない。

やがてそのイライラを落ち着かせるため、彼は大きく一声、言葉を放つ。それは音ではなく、脳内に直接語りかける力だった。

「皆さま、お時間を頂きたい。今日は特別な報告がございます」

鶴の一声に皆、ようやくその天使の方を向く。女神たちはその天使の姿に、顔を思わず緩ませる。

世界一の美貌を持つ天使、るしふあーである。

「それでは皆さま、ここ数百万年のことを思い返して頂きたい。私たちの生活には何か足りなかったと思われませぬか？」

「……女だなー！」

酒の神が言うど、周りの神たちもそれに対して笑い出す。しかし、るしふあーは表情一つ変えることなく続ける。

「創造神です。私たちは過去97万年に渡って、創造神が存在しない状態で生活して来ました」

「正確には96万9587年と11ヶ月だ」

「暦の神が不満げに漏らす。

「訂正ありがとうございます。とにかく我々はその創造神を失った状態で、これまで世界を管理してきました。でもどうです？ 我々はこの97万年になにかを生み出ししましたか？」

「神たちが黙り込む。

「彼らはいくまでその道を極めたものだ。そして、過去に創造神に作られた存在である。

「火の神は火を自在に操れても、それをもちいて別のものを生み出すことはできない。

「それは他全ての神にも言えたことであり、まさに彼らにとつての問題だった。

「ましてや、世界の創造も行われていません。97万年前に起きた戦争で、創造神は失われました。我々はそれからなにをしましたか？ なにもしていませんよね？」

「誰も言い返すことはない。

「……そんな皆様に、朗報があります」

「……ふあーは改まると、こう告げた。

「創造神が出現しました」

「なっ、なんと？」「それは本当か？」

「一体どこの誰なんだ…」

神々の間にざわめきが広がる。

「ですが…少々問題が多い…」

「というところ…」

突然、酒宴の間の扉が大きく開かれる。

どすどすと足音を立てた幼女が走り込む。

「るくしいくふあくっ!!」

少女はるしふあーの前に立つと怒った顔で見上げる。身長が1.5倍はあるだろうか、るしふあーは面倒そうな顔をして少女を眺める。

「私をずつと門の前で待たせるってなによ！ 用があるなら早く呼びなさい!!」

「……どうやら呼ぶ手間は必要なかったみたいですね。ほら、皆さまがいますよ…」

えっ……と小さく眩き、少女は振り返る。

集中した視線に顔を真っ赤に染めるとそのままるしふあーの後ろに隠れてしまう。

「えっと……今の少女は？」

「ああ……この子が例の神です。半神半人……人間と神のハーフですが……」

一同が唾然とする……そんなバカな、とさえ言うものさえいる。

「実は、昨日だけで既に7つの世界を作っています……」

「……!？」

一同は唾然とする。

誰もがそんなの嘘に決まっている……と口を揃えて言う。

「ええ、数千万年に一度の逸材です。ただ……少々世間を知らなすぎる」

るしふあーは少女を無理やり前に押し出すと肩の上の手を置く。

「ですので、彼女に特別な教育係をつけるといふのはどうでしょうか？」

「教育係……というのは、天使のか？」

「いいえ、この子はこの通り、精神年齢が人間と同じです。しかし、神としての素質はそれ以上です。神を教育したことのある天使はたくさんいますが、人間を教育したことがあるのはほとんどおりません……。そこで、彼女を人間界に送り、現地の者……十分な教育を受けており、口が硬く、外部との接点の少ない人間に育てさせるのが妥当と思われるます」

「しかし、そう都合のいい人間がいるかね？」

「……既に候補は絞っています。あとは皆様の許可があればいつでも……」

神々は揃って顔を見合わせ、一つの答えを出した。

第1話 日常的な非日常 1

同じ部屋、1人飯を食べ、空を見上げて、飯を食べ。

部屋から出ることもなく、部屋を出ようとすら思うこともなく、ただこの狭い六畳一間に、パソコンと、ライトノベルと、エロゲを持ち込んで過ごす日々は、実につまらなかつた。

なんて、そんな物語の書き出しでは面白いことはないだろう。ましてや、ここまで読んでくれる人はさらにその20分の1に満たない可能性だつてある。構わない。だが、僕の日常はあまり変化が無い。

大学は一流のところを出たはずなのだが、生来のめんどくさがりが就職への意欲を見事にもみ消してくれた。いや、反省するべきだな。僕が悪い。だがだからといってどうということはない。

家族から自立しているし、収入もある。

イラストは上手いわけでも下手というわけでもない。どこかの有名な出版社からオファーが来ることがあつても、わざわざ自分から仕事をもらいに行くような気力は、あいにく持ち合わせていなかった。なすがまま、なりゆくがままに生きて行くつもりだつ

たし、それ以上も以下もない。

穏やかな日常を、ただ繰り返すだけだと思っていた。

しかし、全てはある日突然、目の前に現れた天使と神によつていとも簡単に書き換えられてしまうのだ。

僕は、大学に非常に近い、学生向けアパートの302号室住んでいる。その日は、たしか外出もせず、家でゴロゴロと過ごしていたはずだ。風呂に入ったのか、もしくは冷蔵庫に食事を取りに行ったのか、そんな感じだった。両親はいないから、好きな時間な起きて好きなことをして眠っていた。

僕は部屋に戻り、いつも通り机に座った。

コンビニから買ってきた弁当を室内のレンジで温め、無言でそれを口にする。いつもの慣れた風景。だが何かが違う。

味が違うのか、いや、そうじゃない。新作は先月出たばかりだし、いつものグラタン以外に特買った記憶もない。

では机の上か……いや、あるべきものが求めた場所にきちんと置かれている。机の上のパソコンも、今しがた眺めていたアニメのタイムシフトを放送している。

では部屋か……いや、部屋の家具の位置は全く変化が無い。違和感もなければ、不具合があるわけでもない。僕は部屋全体を見回し、再び思索する。

何が悪い。何がおかしいんだ？……

ふと、目の前に見慣れないものが現れる。

足……だろうか、のびのびとしていて、美しい。膝が可愛らしく内側に曲がっている。そこから白い一枚の布がうつすらとそのシルエットを保ちながら胸元で押さえられている。頭にはオリーブの冠がつけられ、そこに可愛らしい少女の顔がある。そして、その脇には一匹のカメが抱えられている。

「……えつと……ど……どちら様ですか？」

反応の仕方がわからず、恐る恐る聞き出した僕に、これまでに聞いたことのないイケボで回答したのは、少女ではなかった。

「あなた様に、創造神教育係をお願いしたいのです」

「カメが喋った?!?!?!」

第1話 日常的な非日常―2

えあ?!ちよつと待って冷静に考えさせてくれ!

カメが喋るといふ珍事もそうだが、なぜ見ず知らずの女の子がこんなところでしかも薄い布一枚でいるんだ?

やっちやつた……やっちやつたのか俺!?

ついに少女を家に連れ込んでしまうような人間になってしまったのか!?

「……るしふぁー、本当にこの人でいいの?」

「……下級天使たちに調べさせて最も納得のいく人物だったはずだが……」

生ゴミを見るかのような目で少女は俺のことをじつと見た。いや、きつとそんな汚い目はしていない、ただ怖がつてるだけだ……と思って見てみたがやっぱりそういう目でした。

いったいどのタイミングで入ってきたんだ?

冷静に考えてみる。扉は閉まっていた。俺は冷蔵庫に食べ物を取りに行つて、戻り、チンして開けた。

ここまでの間に違和感は無かつ……いや、あつた!うん!間違いない、絶対この時間

だ。手段は見当もつかないが、少なくともなんらかの方法で奴らは侵入したに違いない。

なんか人智を超えてる的な発言もしてるし……。

「か……神様とはいえ人の家に不法侵入するのは良くないですよ」

「神は所を選ばないのです。お告げをするときも、いつでもどこに現れるか自由に選ばれる。神が望んだ時に望んだ場所に降臨なさるのです」

「なんだか酷い言い訳を聞かされたような気がしなくもない。なんだ、神はそんなに自由なのか。」

「ここまでの時点です。」

「何だ、つまり今喋ったそのカメラが、神であるということか？」

「おい、るしなんとか」

「るしふぁーだ」

「えつと……よく分からんけど、神さまならここから帰ってください。それが僕の精一杯の願いです。頼みます。今すぐ帰ってください」

「駄目です」

「what, s!?!?と頭の中のボブが言った。いや違う。僕が反応しそうになった。と

にかく、主語が僕やら俺やらボブなどに入れ替わるくらい混乱している。

「か……神様は下界の人に興味ないんじゃないですか……ソドムとゴモラみたいに焼き捨てたいんじゃない……」

「あんたの中で神っていったいなんなんですか……日本人は無宗教の人が多くと聞いていましたけどどこまで混沌としたとは思ってませんでしたよ……ねえ、お嬢様」

「……るしふぁーが選んだんでしょ。知らないわよ。それに教育係って何よ！ 私こうみてももう340歳よ！ 少しくらい世界のことをわか……」

少女が続けようとしたのを遮るように、さっきのカメが立ち上がって少女の口を塞ぐ。体格とかその辺的にどう考えても異常な状態なんですがそれは……。

「……本題に入りましょう」真面目な口調に戻ると、突然そのカメが姿を変身させる。まばゆい光と共に姿を現したのは、いわゆる「天使」だった。高貴な貴族を思わせる出で立ちに、明らかに人智を超えた風格を思わせる羽、そして凛々しい青年がそこに立っていた。

「改めまして、三鷹小路様。私は熾天使、天使の総長を務め、またお嬢様の執事を務めています、るしふぁーです」

「えっ……あっ……はい。なんだっけ、教育係だっけ？ 断りたいんだけど……」

「駄目です」

「なんでですか?」

あまりにも予想外の質問に困惑したような様子で、るしふぁーその容姿に似合わぬ早口で答える。

「いや、神託だよ!? そこはもうちよつとさー、常識的に考えてよ。人智を超えた超越的な存在が来たんだよ!? そこはさー、ちゃんと受けてくれないと困っちゃうよ」

「るしふぁー、言葉、崩れてる」

少女の反応とともに、突如としてるしふぁーが体をひねくらせ、その後アイツとでも言ううと、

「す……すみません」と、また天使らしい態度に戻った。

「……こんなんで家庭環境大丈夫なのか……」

「神って皆変だから、るしふぁーも疲れてるんだよ」

言われてみればこっちの世界でも、変な上司の長い自慢話に付き合わされて帰ってきたときにはこんな口調になる気がしなくもない。……いや、どちらかといえばしないな。うん。

「……君がその……創造神……だっけ?」

「そう、私が創造神。だから崇めなさいっ」

少女が俺の目と鼻の先に指を突き出してくる。正面から見て思ったが、目鼻立ちが良

く、世間的には美少女、と呼ばれる姿をしている。

ただ……この傲慢な態度はまだこどもだな……。

「おい、るしふぁー」

「は……はいい……」

「……分かった、俺がこいつをまともにすればいいんだろ」

「ということは、受け入れてくださるのですか!？」

るしふぁーが目を輝かせ、そして顔を覆う。ハンカチのようなもので涙を拭いているようだ。情緒不安定だなこいつ。

俺は少女の首根っこを掴んで、そして横に立たせる。

「こんなわがままな奴に、世界を任せるなんてできないだろ。自信はないけど、やるだけやるよ。お前も苦労してるみたいだし……」

るしふぁーの苦労は、今話してる中でだいぶ滲み出ていた。だったら少しくらいは、手伝つてやったほうがいいだろう。ただ、それだけの理由だ。

「……で、食費とか、生活必需品の拡充についてはどうすればいいの?」

「え……あ、そ、そうですね、それについては……」

るしふぁーが分厚い書類を出そうとしたところで、突如部屋にぼんつ、という音ともに大量の荷物が出現する。本来窓になっているはずの……つまり、ありえない場所に扉

が現れている。

「めんどくさいから、私、ここに住む。あと、るしふあーうるさいから、私がおーけーつて言った時以外はカメのまままでいてね」

『はあっ????』

出会って1時間。天使と始めて意見があったのはそれが初めてだった。